

令和 3 年度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

学 校 教 育 学 科
学校推薦型選抜(一般)

注 意 事 項

1. 合図があるまで、この冊子と解答用紙を開いてはいけません。
2. 合図があったら最初に、受験番号を解答用紙の指定の欄に記入
しなさい。
3. この冊子と解答用紙について、印刷の不鮮明な箇所や、汚れの
箇所を見いだした場合は、すみやかに申し出なさい。
4. 解答用紙は2枚配布しますが、1枚だけ提出しなさい。残りの
1枚は下書き用です。
5. 解答は縦書きで書きなさい。
6. この冊子と下書きに用いた解答用紙は、持ち帰ってください。

課題文を読んで、以下の設問に答えなさい。

課題文

子どもが自然を好きになるもつとも有効な方法は、実際に自然に触れる体験をすることです。山に登ることなくして山を好きになることはできません。昆虫図鑑を見るだけでは、本当に昆虫を好きになることはできないのです。

好きになるとは、相手の本質、すなわち「いのち」と関係をもつことにほかなりません。昆虫が昆虫として生きている本質的な部分にかかわるということです。

都内のある高校で「綿毛の観察」の出前授業をしたことがありました。授業の感想に次のようなものがあり、驚きました。

()はわかりやすいように私が補足したものです。

タンポポの綿毛のように、(萼^{ガク})役割を見つけ直したものであるのなら、きつと変な形をした花や、なんてついているのかわからないようなものにも何かしらの意味や理由があり、それが(そのものがもつ)よさであり、そのものの証で、それは人間にも共通していえることだとわかりました。

タンポポの綿毛は萼が変化してきたものであると「知る」ことは、単にタンポポについて詳しくなったというだけではない価値があります。このことが、人間を含めて、それぞれの存在に意味があることを暗喩していると感じ取ったのです。対象を「知る」ということは対象への「共感」につながっていきます。そして、対象の「いのち」は自分の「いのち」に置き換えられ、自分の存在を問う力になっていくのです。

高校生の感想は、次のように続いていきます。

今の「私」を作っているのは、こうして先生に「やさしさ」を学んだ「私たち」で、これから大学に行き、もつとそれを深め、次は私たちが、未来を担う子どもたちに「本当のやさしさ」を伝える。こうして皆が皆をわかり合い尊重できる世の中になればいいな、と思いました。

私が出前授業に寄せた想いをこのように汲み取ってくれる力もまた、この生徒の共感力なのかもしれないと思います。

ともすると、「自然を愛する心情」は、美しい、かわいいなどの「情」に偏る傾向があります。そうではないのです。「自然を愛する心情」を考^アえるとき、私たち教師は決して「知」と「情」を分離してはいけません。「知」と「情」を一体のものにとらえた先に、「自然を愛する心情」の本質があると、私は考えています。

3年生の理科の授業で、「昆虫の歩き方」について取り上げたことがあります。6本の脚をどのように使って歩いているのか、私たちは普段気にすることはありません。しかし、観察してみると、歩き方一つに昆虫の「いのち」が見えてきます。

はじめに、次のような活動を試みました。

3人一組でそれぞれ前脚、中脚、後脚になって歩いてみます。ムカデ競争のように、右、左、右…と足を揃えながら歩いたところで、カブトムシはどうもそのようには歩いてはなさそうだ、という意識が芽生えます。「実際はどのようにして歩いているのだらう」という問いが生まれ、視点が明確になりました。

次に、カブトムシの歩き方を丁寧に見てみます。

ここで大切なことは、以下の点です。

- ① 何を見るのか、という視点が決まっている。
- ② 見たいという問題意識が切実である。
- ③ 見ることによって当面の問題が解決できるという見通しがある。

このような条件を満たしていることによって、「よく見る」という子どもの活動が意味をもってきます。ただやみくもに「よく見なさい」というのは、子どもにとって有効に機能しない場合があるということです。

よく見ることによって、子どもは新しい何かを発見していきます。それまでの見方の枠組で見たときに、それには当てはまらない事実に出会うのです。そこには、驚きがあります。子どもは新鮮な驚きによって、見方の枠組みの「作り替え」を行うのです。

言い換えれば、よく見ることによって、見方が発展しているとも言えるでしょう。人間はいつも予見によってものを見ていますが、その予見を打ち破り、新たな事実やきまりに気づいたとき、「そうか、そうだったのか」という深い感慨にも似た喜びを感じるのです。このように考えると、よく見ることは、直接子どもの成長にかかわることと言えるでしょう。

理科の基本は、このように「よく見る」ことです。すなわち「観察」です。理科は観察・実験と言われますが、実験は条件を制御した中での観察ですから、観察の一部と言えます。観察には「観る」だけでなく「察すること、すなわち「見えないものを見ること」が含まれます。

理科の授業では、観察を通して、見えないものを見るための感性を磨いているのです。

目に見えるものだけに限らず、目には見えない関係や変化、本質や心を求めていくことが、これからの理科教育には必要ではないでしょうか。

そのためには、対象に近づき、対象と一体化していくことです。対象の本質である「いのち」とつながるといえるのは、必ずしも仲間や生き物のように生きているものだけではありません。鏡なら鏡の「いのち」、電気なら電気の「いのち」もあっていいわけです。

そこに、対象への「共感」が生まれるとするならば、子どもは自然の凄さや神秘さなどを前に、つつましくなることでしよう。言い換えれば、「やさしさ」が子どもの内面に育つのです。

〔出典…露木和男『優しさ』の教育 センス・オブ・ワンダーを子ども達に〕(東洋館出版社二〇一九年)より一部を改変して使用した。〕

設問一 傍線部アで、筆者は「自然を愛する心情」を考えると、「知」と「情」を分離してはいけないと述べています。それはなぜかを筆者の考えにそって二〇〇字以内でまとめなさい。

設問二 傍線部イで、筆者は「目に見えるものだけに限らず、目には見えない関係や変化、本質や心を求めていくこと」の重要性を述べていますが、あなたはどのように考えますか。課題文を踏まえた上で、自分の体験や見聞をまじえながら六〇〇字以内で述べなさい。